

平成29年漁期イカナゴシニコ(新子)漁況予報

平成 29 年 2 月 16 日
 兵庫県立農林水産技術総合センター
 水産技術センター

1. 産卵親魚の調査結果

播磨灘北東部の鹿の瀬で、12月5日から1月6日にかけて延5回、文鎮漕ぎによる採集調査を実施した。

(1) 親魚密度

文鎮漕ぎ 1 曳当たりの採集尾数は 19.0 尾で、昨年及び平年値を下回った。年齢組成は 1 才魚が 97.4%、2 才魚以上が 2.6%で、2 才魚以上の割合が低下した(表 1)。

表1 親魚密度(文鎮漕ぎ1曳当たりの採集尾数)

年	1才魚	2才魚以上	全 体
今 年	18.5尾 (97.4%)	0.5尾 (2.6%)	19.0尾
昨 年	20.0尾 (80.0%)	5.0尾 (20.0%)	25.0尾
平 年	189.1尾 (81.5%)	42.9尾 (18.5%)	232.0尾

(平年:平成17~26年の10年間の平均値)

(2) 親魚の全長組成

親魚全体の平均全長は 95.1mm で、昨年の 104.3mm をやや下回った (図 1)。

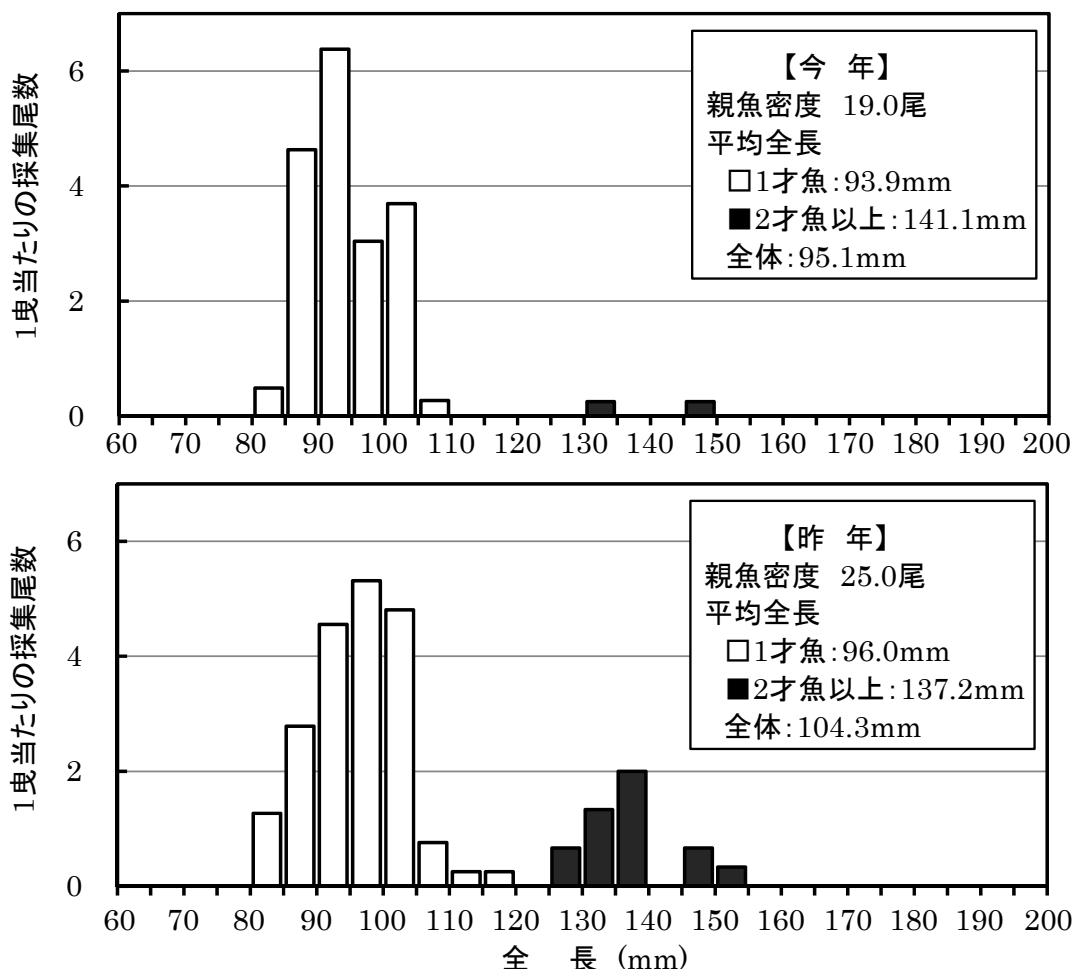


図1 親魚の全長組成

(3) 産卵量指数

今年の産卵量指数は 0.17 となり、昨年と同様低い値であった（表 2）。

*産卵量指数：総産卵量の目安となる数値。1 尾当たりの産卵量は親魚の大きさによって異なるため、毎年親魚密度と全長組成から算出しています。

表2 産卵量指数(昭和62年漁期の産卵量を1.00とした場合の相対値)

年	1才魚	2才魚以上	全体
今年	0.15 (88.2%)	0.02 (11.8%)	0.17
昨年	0.18 (50.4%)	0.17 (49.6%)	0.35
平年	1.79 (55.9%)	1.41 (44.1%)	3.20

(平年：平成17～26年の10年間の平均値)

(4) 産卵盛期

今年の雌親魚の生殖腺（卵巣）熟度指数は、12月26日から1月6日にかけて減少した（図2）。26日の調査ではまだ産卵が始まっていなかったが、1月6日の調査では採集した全ての親魚が産卵を終えていた。

以上のことから、鹿の瀬における今年の産卵盛期は、昨年とほぼ同時期の 12月27日から1月5日の間と推察された。

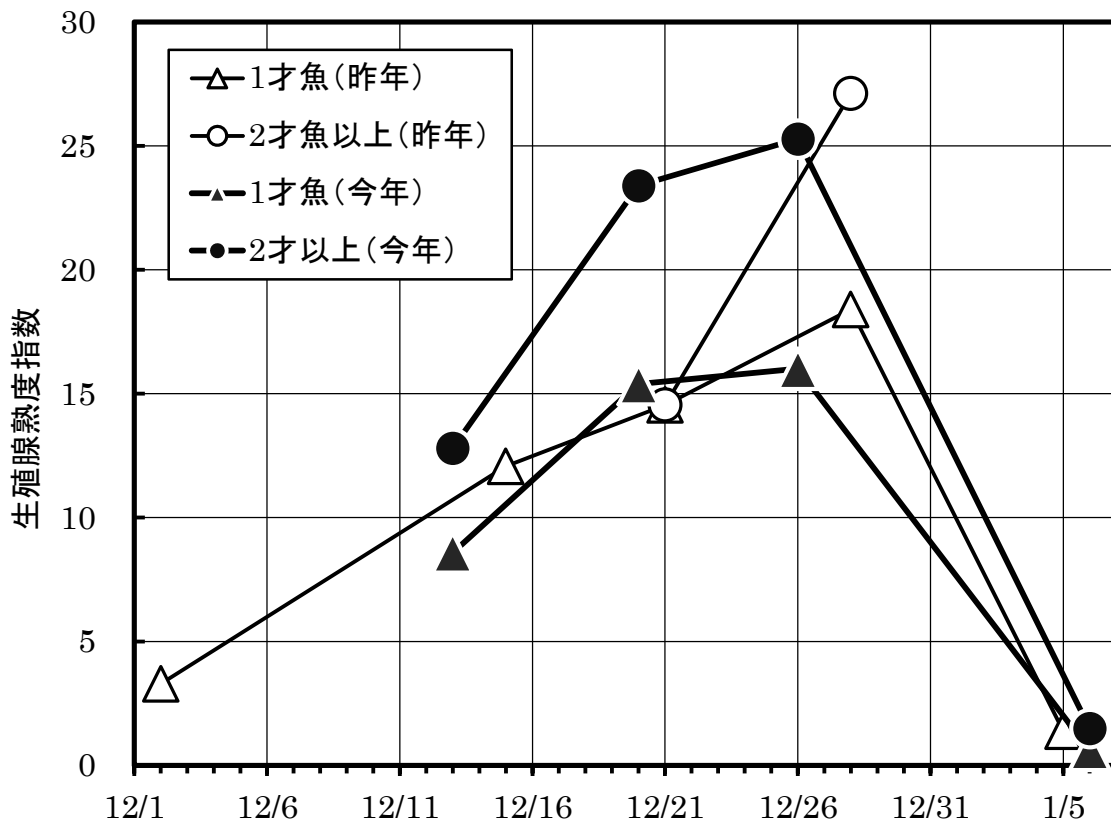


図2 雌親魚の生殖腺熟度指数の変化

(昨年度12月2日、15日、1月5日の調査では、2才以上の雌親魚が採集されなかったためグラフには掲載していません。)

2. 稚仔の調査結果

稚仔の調査は1月24日、25日、26日に実施し、表層から底層までの往復傾斜曳き（口径60cmのボンゴネット使用）により採集した。

1地点当たりの平均採集尾数は、播磨灘が1.1尾（昨年：12.6尾）、大阪湾が2.5尾（昨年：5.9尾）、紀伊水道が0.3尾（昨年：0.8尾）で、各海域とも昨年を下回り、分布量は低水準であった（図3）。

全長組成の平均値は、播磨灘が8.2mm（昨年7.5mm）、大阪湾が7.5mm（昨年5.5mm）、紀伊水道が9.5mm（昨年7.6mm）であった（図4～6）。播磨灘では昨年とほぼ同程度、大阪湾では昨年度値を上回った。紀伊水道では、昨年度の値や他の2海域よりも大きかった。また播磨灘では、北西部海域において僅かながら12～16mm台の個体が採集された。

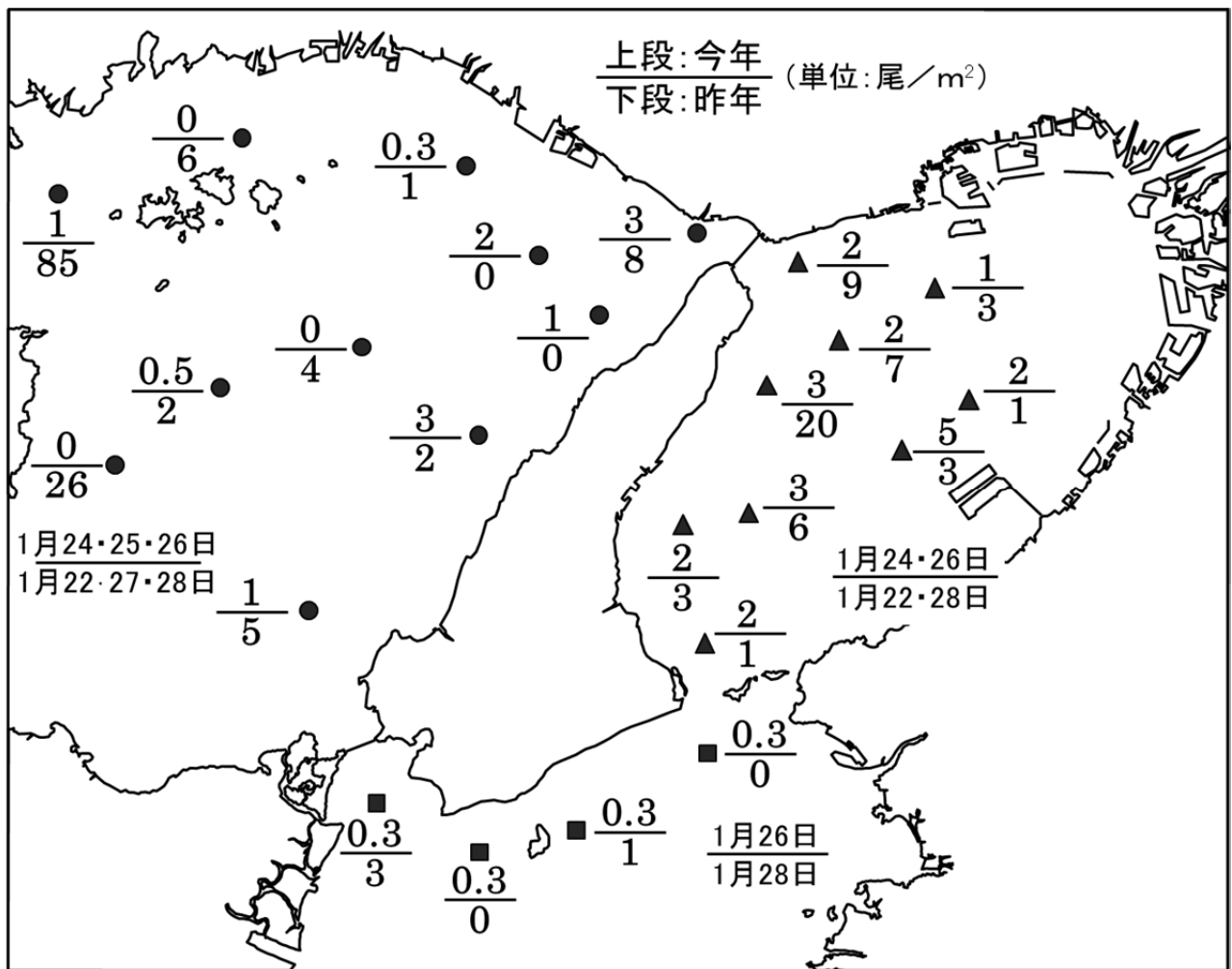


図3 稚仔の採集尾数

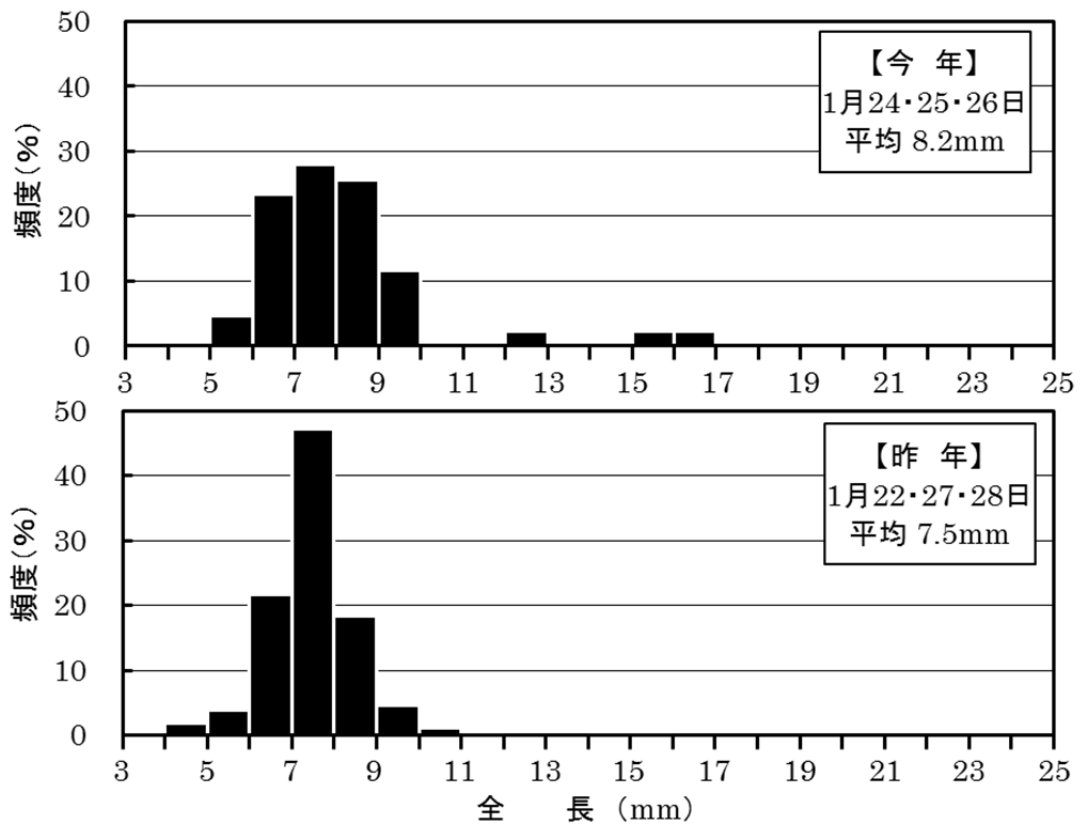


図4 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(播磨灘)

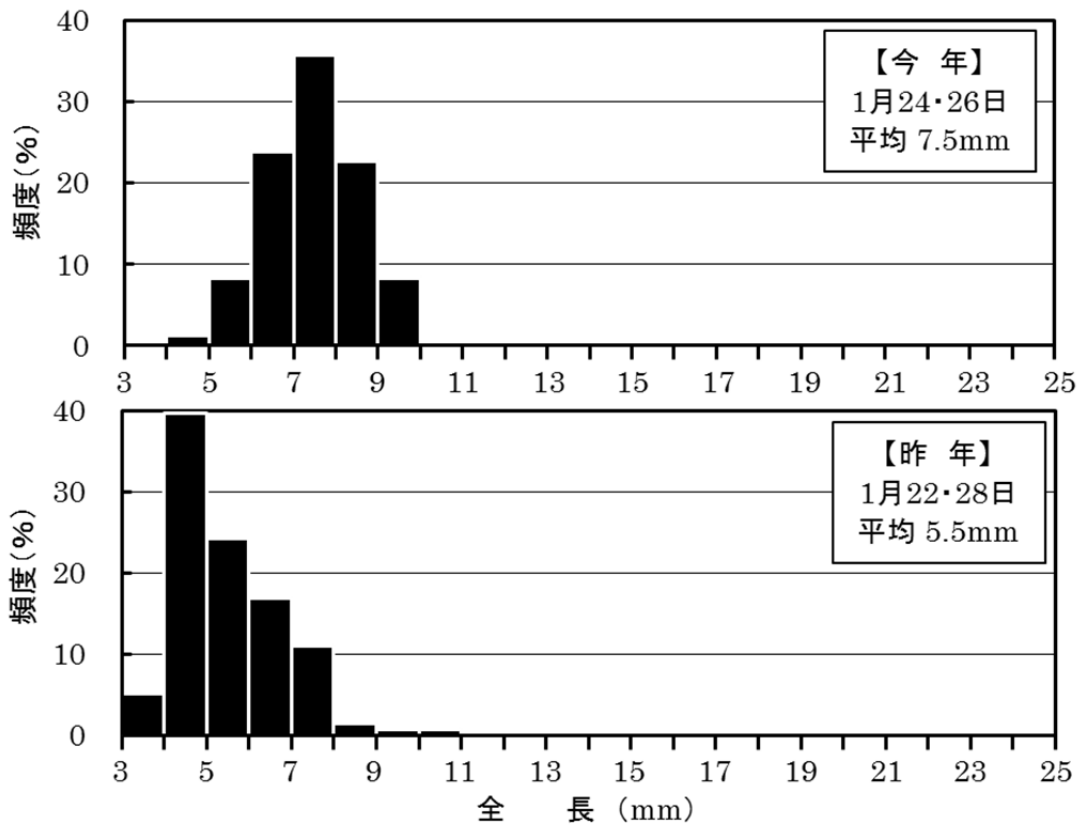


図5 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(大阪湾)

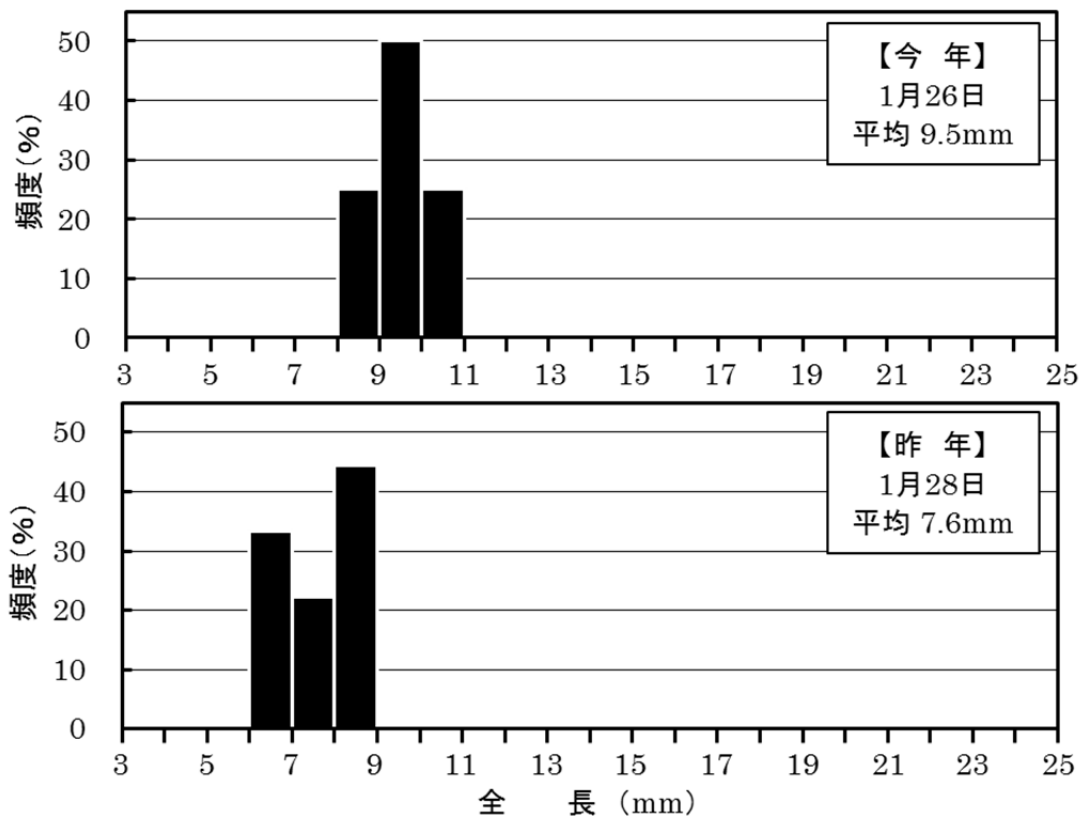


図6 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(紀伊水道)

3. 稚仔の成育の見通し

稚仔の成長速度は水温の影響を強く受け、水温が高いほど成長速度が速くなる。今年の明石海峡部の水温は、昨年程ではないものの、平年（平成18～27年の10年間の平均値）に比べて高めで推移している（図7）。

2月2日に大阪管区气象台から発表された平均気温の1か月予報（一週目は平年並み、二週目は低い）から判断すると、今後の水温は平年より高めの値から徐々に平年値に近づくと予測され、稚仔の成長速度も平年よりやや速めから平年並みになると考えられる。

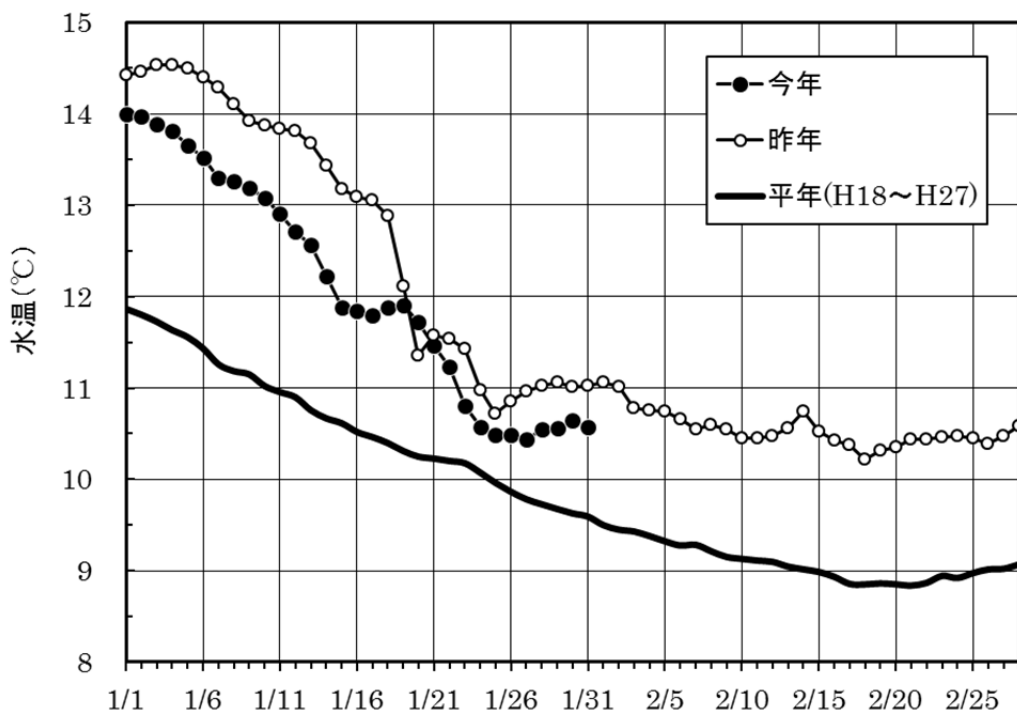


図7 明石海峡部2.5m層日平均水温の推移

4. シンコ漁の予測

昨漁期の漁獲量は、大阪湾及び紀伊水道では平年（標本漁協における平成 18～27 年の 10 年間、2、3 月のシンコ漁獲量の平均値）及び前年を下回った。一方、播磨灘では備讃瀬戸から加入してきたと考えられる群れが、播磨灘西部海域を中心に漁獲されたため、平年をやや上回り、前年を上回った。

今漁期は昨年と同様、産卵量や稚仔の分布量が少ないこと、昨年のように備讃瀬戸からのシンコの加入が期待できないことから、“今漁期のシンコ漁獲量は、播磨灘では平年及び昨年を下回り、大阪湾、紀伊水道では平年を下回り、昨年並み～昨年を下回る”と予想される。

注) シンコの網おろし日は各地区漁業者の自主的判断によるが、過去の経験から網下ろしが早過ぎた場合には不漁になる可能性が高い。網おろし日の決定にあたってはこの点を十分に考慮されたい。